（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　松浦　高志

伝統的な文法学、文献学、印欧語比較言語学の研究成果によって、古代ギリシア語の定動詞が本来接語的にふるまいアクセントを持っていなかったことは、以前より示唆されていた。本論文は、（概ね紀元前 4 世紀半ば以前の）古期ギリシア語碑文を資料として利用し、このことを直接的かつ網羅的に示そうと試みた研究である。利用資料には、アクセントの所在を明示的に表す記号はないが、碑文に現れる連声、区切記号、音節文字における空母音を分析することで、定動詞の接語性を推定することが可能である。

第 1 章（序論）では、中世写本に用いられる古代ギリシア語のアクセント記号の起源が紀元前 3~2 世紀に遡及し得る一方で、この記号が古代ギリシア語のアクセントの実状を必ずしも完全に再現しているとは限らないことを説く。そして、定動詞に付されるアクセント記号の語頭寄りの傾向が定動詞の前接性を示唆すること、また従来接語としてみなされている単語以外にも、事実上接語としての性質を備えているものが存在したことを指摘する。

第 2 章では、区切記号の用法の詳細が検討される。単語（群）を区切る区切記号が定動詞の直前になければ、それは定動詞の前接性を裏付けることになる。他方で、区切記号は固有名詞を際立たせる機能をも備えているため、定動詞を直前の固有名詞と分離しているように見える場合でも、定動詞の前接性は否定できないことが明らかになった。また、区切記号が定型的表現の後に置かれる場合があることも仮定される。碑文に用いられる一見不要な動的 ν に関する第 3 章の考察は、この仮定の妥当性を示唆する。

第 4 章では、ゴルテュン方言碑文中の外連声と語末の「母音＋-νς」のふるまいとを関連づけ、ὀμνύνς となることが期待される処で ὀμνύς となっていることを、定動詞の前接によって説明する。この他、語末母音省略の例から定動詞は後接性も備え得ること、命令を表す不定詞や指示代名詞にも接語性があることが検証された。

第 5 章では、キュプロス音節文字碑文で用いられている空母音や区切記号の用法を精査した。とくに、キュプロス音節文字碑文のなかで最大の長さを持つ『イーダリオンの青銅板』（Idalion tablet）について、適宜他の碑文と比較しつつ、同碑文に含まれる定動詞の多くが接語的に機能していることを示した。

区切記号や音節文字の空母音の用法は複雑であり、想定される定動詞の接語性とは必ずしも相容れない例も存在する。精緻な考察を経てもいくつか疑問点は残った。しかし、全体として定動詞の接語的性質は明らかになった。加えて、従来の接語やアクセントの概念に一定の見直しを迫り、韻律上の問題にも有効な説明を与えた。また、従来ギリシア語アクセントは事実上有か無の二段階しかないとされてきたが、第 4 章の検証に基づき、古代ギリシア語に中間的アクセントが存在した可能性を指摘した。

以上のような有意義な成果に恵まれていることから、本論文は博士（文学）の学位に値すると判断する。